

第 部門 京都伏見における市街地形成及び酒蔵立地の変遷に関する研究

大阪工業大学工学部 学生員 ○杉山 大峰
 大阪工業大学工学部 学生員 上原 学
 大阪工業大学工学部 正会員 岩崎 義一

1. 研究の目的

京都伏見は関西の主要な酒造産地の中でも長い歴史を持ち、現在においても伏見区の全域に酒造業関係施設が点在している。また伏見という地域は豊臣期、徳川期の政治の舞台の1つであり、明治期においては陸軍の拠点になるなど歴史的に重要な役割を担ってきた。²⁾⁴⁾⁷⁾ このように歴史的に重要な位置にありながら、その市街地の変遷をまとめた研究は殆どみられない。よって本研究では、伏見における市街地形態・酒蔵立地分布・インフラの変遷を地図化し、これを基に市街地の動向と酒蔵立地の相互関係を考察した。

2. 市街地の変遷

図 - 1 ~ 5 の年代別市街化動向をみると下記のように示される。

市街地範囲：伏見の市街地範囲と骨格街路は江戸末期から明治期にかけて変化はなく、市街地区域内において人口・住宅の集積によって密な形態をとる。昭和前期に入ると鉄道など広域インフラの整備により、伏見の市街地範囲は従来の範囲から外延的拡大をみせた。

酒蔵立地の分布状況：江戸期から明治期までの酒蔵の立地分布には、主に舟運が大きく関係している。特に、江戸前期・江戸後期においては舟運付帯施設（荷揚浜・船着場）の周辺に立地する傾向が強く、またそれに当てはまらない酒蔵については、ほぼ全てについて運河の周辺に立地していると言える。

また、昭和前期から現在にかけての酒蔵の立地分布形態は、分散立地をし始めるということが特徴として挙げられる。これは、道路インフラ整備の充実と共に車両技術も向上したことが大きく関係している。この2つの要素の向上により、酒蔵立地の自由度が高められたと考えられる。

舟運付帯施設の変化：江戸期から明治期にかけての荷揚浜は、主に江戸前期に主要とされた地域を中心に立地し、市街地内に存在する。

明治期において荷揚浜は従来に比べて範囲の拡大を見せた。これは、琵琶湖疎水の貫通に伴い、船の喫水におけるキャパ

シティの増加が荷揚浜の拡大への要因の1つであると考えられる。

昭和前期に入ると市街地内に荷揚浜は消失した。これは、高瀬川・琵琶湖疎水における舟運の廃止が大きく関わっていると考えられる。また、舟運の廃止、荷揚浜を含めた舟運付帯施設における形態変化の要因には、明治期に入って輸送に求められる要素が近代化し、舟運が輸送において時代的要求の変化に対応できなくなったことが挙げられると考えられる。

また、昭和前期に整備された伏見港は、従来までの荷揚浜・船着場といった舟運付帯施設が見られなくなった。これは、土木技術の向上に伴い、市街地における各インフラ機能が強化され、伏見港が旅客と貨物の一体化が図られたことによるものを成し得た結果であろう。

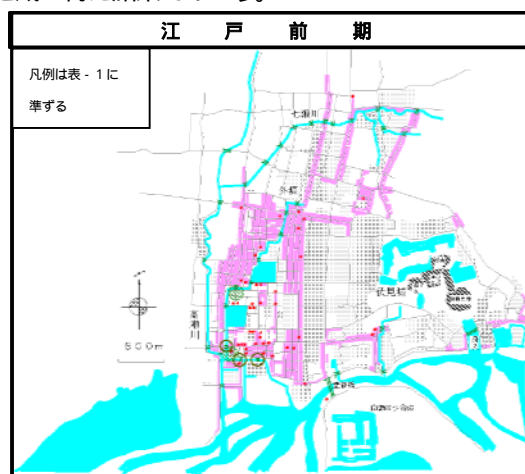


図 - 1 伏見における市街地変遷【江戸前期】¹⁾³⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾

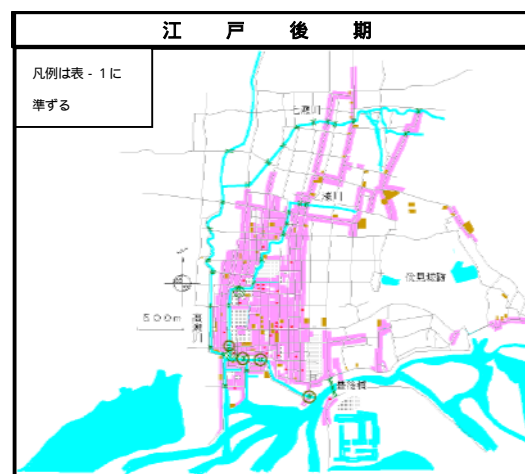


図 - 2 伏見における市街地変遷【江戸後期】¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾

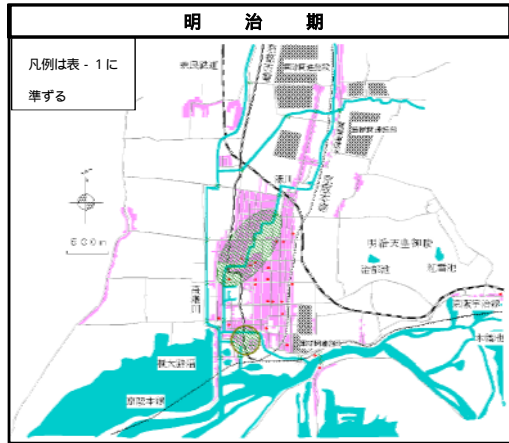


図 - 3 伏見における市街地変遷【明治期】2)4)5)6)7)

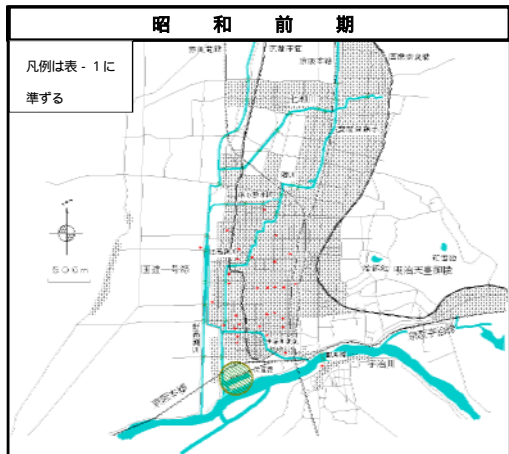


図 - 4 伏見における市街地変遷【昭和前期】5)6)7)

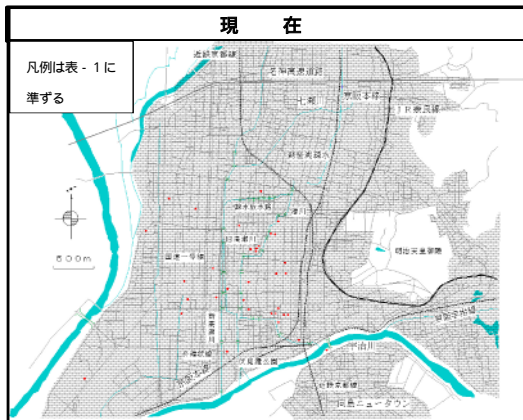


図 - 5 伏見における市街地変遷【現在】5)6)7)

表 - 1 市街地変遷図における凡例

市街地	江戸前期～明治期		昭和前期～現在	
	町屋	武家屋敷	寺院	酒蔵
町屋				
武家屋敷				
寺院				
酒蔵				
荷揚浜				
船着場				

3. 酒造産業とインフラストラクチャーの関係性

伏見における酒造産業が隆盛を迎える時期には、従来から存在する広域交通インフラとしての幹線道路に加えて、舟

運・鉄道等の新たな地域交通インフラの整備が伏見の酒造産業を支えたと言える。停滞期においても新たな交通インフラの台頭が酒造産業を支えたようである。よって、伏見の酒造産業が命脈を保ち続け現在に存在したのは、従来の広域交通インフラに加えて各時代における新たな地域交通インフラの存在があったといえる。(図 - 6)

明治期に、新たに整備された鉄道とともに酒蔵の立地要因が舟運から鉄道に移行した。昭和前期から現在にかけては、高速道路整備と幹線道路のさらなる充実に伴ない全国の消費地を獲得できるようになり、このことが要因となって酒造産業が急拡大をみせたと考えられる。

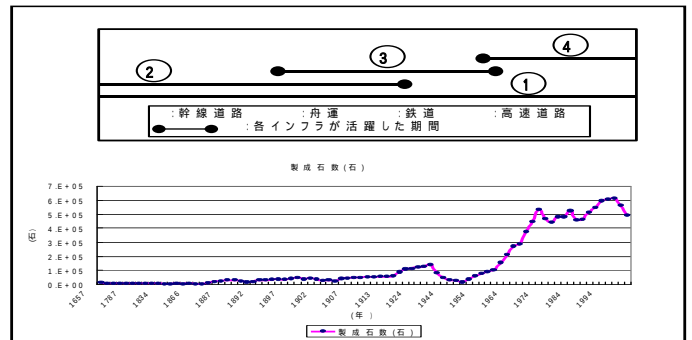


図 - 6 インフラと酒における製成石数の変遷

4. 結論

本研究では、伏見における近世から現在にかけてのインフラと市街地形態の変化及び酒蔵立地の要因についての相互関係を考察し下記のことを明らかにした。

市街地範囲とその骨格は江戸末期から明治期にかけて変化が見られない。

酒蔵は、江戸期においては舟運付帯施設、または運河の周辺に立地していた。また、近代から現代にかけて分散立地をし始めた。

明治期において琵琶湖疎水の貫通により船の喫水におけるキャパシティが増加し、荷揚浜の範囲が大きく広がった。土木技術の向上に伴う各インフラ機能の強化により、伏見港における荷揚浜・船着場(貨物・旅客)の一体化が行われた。

伏見における酒造産業の急成長は、新たな交通インフラの台頭によって支えられた。

《参考文献》1)日本史研究会編/豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城 2)京都府紀伊郡役所編/京都府紀伊郡誌 3)城州伏見町圖 4)伏見町役場編/御大札記念京都府伏見町誌 5)月桂冠株式会社社史編纂委員会/月桂冠三百六十年史 6)伏見酒造組合一二五年史編纂委員会/伏見酒造組合一二五年史 7)聖母学院短期大学伏見研究会編/伏見学とはじめ